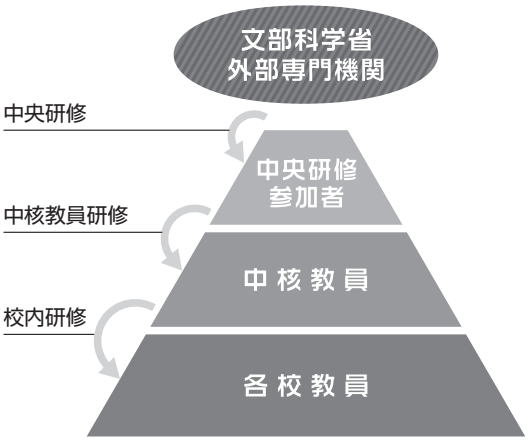
FOREIGN

研修指導者編

ACTIVE ENGLISH

1 英語教育推進リーダー中央研修・中核教員研修の概要及び校内研修の進め方

文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成 25 年 12 月 13 日公表）に基づき、平成 26 年度より小・中・高等学校における英語教育推進リーダーを養成するため、外部専門機関と連携した中央研修を開始した。中央研修参加者は、英語力及び英語指導力の充実を図るとともに、研修修了後には、「英語教育推進リーダー」として各地で研修（小学校の場合、中核教員研修等）の講師として研修内容の伝達・普及を行うこととされている。そして、中核教員研修を受講した教員（各小学校の中核教員）は、所属校において校内研修等を通して研修内容の普及を図ることが期待されている。



〈図表 1〉外部専門機関と連携した英語指導力向上事業

このように、小学校においては、英語教育推進リーダー中央研修及び中核教員研修、そして各学校の校内研修が密接に結びついている〈図表 1〉。ここでは、それぞれの概要や効果的な実施について述べることとする。

1 英語教育推進リーダー中央研修の概要

(1) 中央研修の内容

中央研修には、各都道府県・政令指定都市教育委員会より推薦された教員が参加する（小学校では全国で年間約 200 名参加）。中央研修は、外部専門機関（平成 26 ～ 29 年度はブリティッシュ・カウンシル）と連携して行われ、年間 2 回の集合研修を軸として長期間を通じた継続的な研修が実施される〈図表 2〉。

①集合研修Ⅰ……参加者自身の授業実践のための研修
②授業実践……集合研修Ⅰで研修した内容をもとに所属校において授業実践を行う
③集合研修Ⅱ……研修実習を行うための研修
④研修実習（※）……講師として研修内容の伝達・普及を行う

※小学校の中央研修参加者が行う研修実習は、各地域において中核教員研修として実施される（研修内容は「2 中核教員研修の概要」参照）。

(2) 英語教育推進リーダーの役割

上記の中央研修①～④を終了した参加者は、文部科学省より「英語教育推進リーダー」として認証される。英語教育推進リーダーは、各地域における英語教育の改善・充実のために、次のような役割を積極的に果たすことが期待される。

- 小学校教員や中・高等学校の英語担当教員を対象とした研修の講師
- 研究会や研究授業等における講師、助言者
- 指導・評価の改善のための日常的な指導・助言　等

聞くこと	1	絵本の活用
	2	絵本の活用 マイクロティーチング
	3	歌の活用
話すこと	1	ロールプレイの活用
	2	マイクロティーチング
初期段階の読み書き	1	アルファベットの活動
	2	教員のための知識
	3	字がもつ音についての活動

〈図表 2〉平成 29 年度 集合研修の主な研修内容（小学校）

英語教育推進リーダーを活用した取組として、複数の小学校を定期的に訪問しながら外国語活動の授業の支援や助言を通して、小学校教員の指導力向上を図っているという事例もある。このように、各地域において、これまで中央研修を受講した英語教育推進リーダーを積極的かつ効果的に活用することが期待される。

2 中核教員研修の概要

(1) 中核教員研修の内容

中核教員研修（中央研修参加者にとっては研修実習）は、各地域の教育委員会において計画され、中央研修参加者が講師となり各小学校の中核教員等（各校1名程度、主に外国語教育担当の教員）を対象に行われる。中央研修の研修内容を確実に伝達・普及させるため、中核教員研修は合計で14時間程度実施することとしている。なお、地域によっては、講師（中央研修参加者）による公開授業や教育委員会の担当指導主事による説明、大学教授による講義等を加えるなどの工夫をしているところもある。

(2) 中核教員研修の実施方法の工夫

中核教員研修は、主催する教育委員会が各地域や小学校の実情、講師の都合等を踏まえて計画・実施しているところである。実施時期は、中央研修の「集合研修Ⅱ」を終えた後（12月頃）から翌年度にかけて複数回にわたって行っているケースが多い。夏季休業中に3日間程度を利用して集中的に行うところもあるが、1回あたりの研修時間を短くして5～7回程度実施しているところも増えてきている。

中核教員研修を通して、研修内容の伝達・普及の効果を高め、中核教員の指導力向上を図るためには、できる限り複数回に分け、間隔を空けながら継続的に実施する方法が望ましい。そうすることで、参加する中核教員は、研修と研修の合間の期間に、研修で学んだ指導法等を使って授業実践を行うことができる。そして、実践してみた成果と課題を次の研修の機会に他参加者と共有したり、講師から助言をもらったりすることで、また次の実践につなげることができる。このように、研修と授業実践を有機的に結び付けることにより、中核教員の指導力が着実に向上し、さらに所属校における他教員に対する伝達・普及の効果も高まると期待される。

➡参考「小学校教員の指導力向上に向けた外国語（英語）教育中核教員研修の充実」川崎市の事例（p.192～195）

(3) 中核教員に期待される役割

各小学校の代表である中核教員には、自身の指導力を高めるとともに、所属校において次のような役割を果たすことが期待される。

- 外国語教育に関する校内研修の計画・実施
- 校内研修における授業公開
- 外国語・外国語活動の授業を行う他教員に対する日常的な助言・支援
- 専科指導（学年間での授業交換等も含む）
- 年間指導計画や授業で使用する教材等の作成　　等

3 外国語教育に係る校内研修の進め方

新学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）は平成 32 年度より全面実施となるが、小学校外国語教育の早期化・教科化に向けて、小学校教員の多くは、「今まで外国語活動の授業をしたことがない」「読み書きの指導はどうやって行うのか」「評価はどのように行うのか」「自分の英語力に自信がない」などの不安を抱えていることと思われる。これらの不安を解消しつつ、新学習指導要領の全面実施に向けた準備を着実に進めるためには、各小学校における校内研修の充実が最大の鍵となる。

ここでは、各小学校において、校内研修を効果的に実施するためのポイントを述べる。特に、各小学校において校内研修を運営する立場である、中核教員（外国語教育担当）、研究主任、管理職の方々に理解いただきたいところである。

(1) 学校長のリーダーシップによる校内研修体制づくり

各小学校において、校内研修を効果的に運営するためには、学校長のリーダーシップが欠かせない。外国語教育の早期化・教科化に向けた教員の不安や悩みを解消し教員一人一人の指導力を着実に向上させるために、校内研修の充実を図ることは、学校経営上重要な課題のひとつである。その中で、「授業づくり」に対する教員の士気を高めながら、校内研修をリードする立場である中核教員や研究主任に対して適宜助言や支援を与えることが必要である。

日々、会議や学校内で生じる様々な問題への対処等もあり時間確保が難しい中で、学校長がリーダーシップ、マネジメント力を発揮し、教員が研修する機会を担保しつつ、全教員が一丸となって指導力向上に取り組むことができるよう、中核教員や研究主任を中心とした校内研修体制を確立することが大切である。

(2) 中核教員による校内研修の計画・実施及び授業公開

前述した通り、中核教員に求められる役割を大別すると、「外国語教育に関する校内研修の計画・実施」など企画運営面での役割と、「校内研修における授業公開」など実践者としての役割の 2 つがある。

企画運営面での役割	学校長の指導のもと、校内の研究（研修）主任や教務主任と連携・協力し、年間の見通しをもって外国語教育に係る校内研修を計画することが必要である。特に、国語や算数等の他教科等を研究対象として校内研修を行っている場合は、その中で外国語教育に係る校内研修の時間をしっかりと確保することが大切である。夏季休業や冬季休業などの長期休業期間を利用したり、全教員が出席する職員会議や打合せ後の短い時間を利用したりして、研修機会の確保や工夫に努めたい。
実践者としての役割	校内の他教員に向けて自らが積極的に授業を公開し、授業参観や研究協議の機会を提供することが求められる。中核教員研修で学んだことを生かしながら、日常的な授業実践を通して自らの指導力を向上させるとともに、授業公開等を通して他教員に伝達することが必要である。平成 23 年度の外国語活動導入から 7 年が経過しているが、これまで、外国語活動の授業の経験がない、中には、授業を参観したことがない教員も少なからずいると思われる。まずは、現行の外国語活動の授業を、管理職も含めた校内の全教員に見てもらう機会を作ることを最優先としたい。

(3) 外国語教育に係る校内研修で活用する資料

文部科学省では、平成 30 年度からの先行実施を含む移行期間中に、あるいは、平成 29 年度のうちから、各小学校において研修や準備に取り組めるよう次を配布している（予定も含む）。これらを活

用し、実際の授業場面を想定しながら、実践的な研修を進めていくことが必要である。

〔平成 29 年 3 月〕

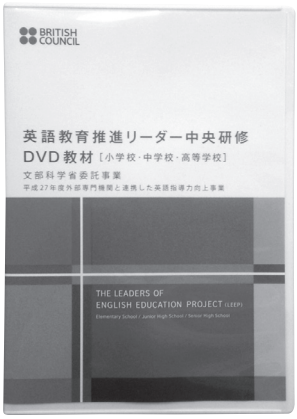
高学年向け補助教材『Hi, friends! Plus』及び中学年向け補助教材の絵本 2 種類（『Good Morning!』『In the Autumn Forest』）のデジタル教材〈図表 3〉

〔平成 29 年度中〕

新教材（児童用冊子・指導書・デジタル教材）、年間指導計画例、年間活動例、学習指導案例、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（本書）』

〈図表 3〉中学年向け補助教材の絵本のデジタル教材

また、併せて、平成 27・28 年度に各小学校に配布している「英語教育推進リーダー中央研修 DVD 教材」を活用することで、校内研修をより効果的に実施することができる。

平成27年度配布のDVD教材	• 学校種別に作成。 • 中央研修及び中核教員研修の内容（8 項目）に沿った内容。 • 中央研修参加者が受講した集合研修の一部、中央研修参加者による授業及びインタビュー等で構成。	
平成28年度配布のDVD教材	• 各学校段階の学びを円滑に接続させるという観点から、小・中・高等学校それぞれの授業実践等を 1 巻に収録。 • 小・中・高等学校で各 3 つの授業等を取り上げ、授業場面とともに授業者やトレイナーによる解説、児童生徒による授業の振り返りや感想等を含めて収録。	

(4) 外国語教育に係る校内研修の内容例

外国語教育に係る校内研修の内容は、授業づくりや指導法等を扱う「指導力向上研修」と、自身の英語のスキルアップを目指した「英語力向上研修」の 2 つに大別される。次ページに研修内容例を示すが、校内研修を計画・実施するにあたって、必要なメニューを選択し効果的に組み合わせて行うことが必要である。

また、可能な限り、同じ中学校区の小学校合同で研修会を実施することで、中学校との円滑な接続のために共通指導、共通取組を推進することができる。

〈指導力向上研修のメニュー例〉

60 ～ 90 分程度のまとまった時間を使って実施するとよい。

① 授業研究型（研究授業＋協議）【授業をする・観る】
② 体験型（児童役になり模擬授業を受ける）【授業を体験する】
③ 参加型（複数教員で協力して授業づくりや教材作成をする）【授業をつくる】
④ 理論型（実践を支える理論について研修する）【理論を学ぶ】

※担当指導主事（都道府県や市区町村の教育委員会）、英語教育推進リーダー、大学教授等を招聘し、指導助言をしてもらうことで、より効果的な研修となる
※上記以外に、校外で行われる研修機会（都道府県や市区町村の教育委員会、教育研究会、学会等が主催する研修、他校で行われる授業公開等）についても積極的に活用する

〈英語力向上研修のメニュー例〉

会議の合間など 5 ～ 15 分程度の短い時間を使って、定期的・継続的に実施するとよい。

① 教室英語
② 英語の発音トレーニング
③ 歌・チャンツ、絵本の読み聞かせ
④ ALT との打ち合わせで使う英語
⑤ 日常英会話

※講師として、ALT 等のネイティブ・スピーカーを活用するとよい

(5) 外国語教育に係る校内研修計画例

小学校では、複数年計画で、国語や算数等の研究対象教科等を決めて校内研修［研究］を行っているところも多いと思われる。そのため、以下では、他教科等を対象とした校内研修［研究］を行っている中で、数回程度、外国語教育に係る校内研修を実施する場合（パターン A）と、年間を通じて外国語教育を研究対象として校内研修を実施する場合（パターン B）について、校内研修計画の例を提示する。

パターンA 他教科等を対象とした校内研修（研究）を行っている中で、実施する場合の例

時 期	指導力向上研修	英語力向上研修
1 学期	• 模擬授業　60分	【通年】教室英語や発音トレーニングを中心に • （週 3）職員朝会で「ミニ研修会（5分）」
夏季休業	• 中核教員研修の内容伝達　120分	• 絵本の読み聞かせ講習会（60分）
2 学期	• 研究授業及び協議　45分＋90分 ［授業者：中核教員 指導助言：英語教育推進リーダー］	
冬季休業	• デジタル教材活用　90分	• ALT との打ち合わせ英語講習会（60分）

パターンB 年間を通じて外国語教育を研究対象として校内研修を実施する場合の例

時 期	指導力向上研修	英語力向上研修
1学期	• オリエンテーション 60分 • デジタル教材活用 60分 • 指導案検討 90分 • 模擬授業 60分 • 研究授業及び協議① 45分＋90分 ［指導助言：英語教育推進リーダー］	【通年】教室英語や発音トレーニングを中心に • (週3) 職員朝会で「ミニ研修会(5分)」 • (月1) 職員会議後に「ミニ研修会(10分)」
夏季休業	• 中核教員研修の内容伝達 120分 • 簡単な活動案と教材作成(チーム別) 90分 • 模擬授業(チームごとに発表) 90分 • 2学期に使う教材作成 90分	• 絵本の読み聞かせ講習会① 60分 • ALTとの打ち合わせ英語講習会 60分
2学期	• 指導案検討 90分 • 模擬授業 60分 • 研究授業及び協議② 45分＋90分 ［指導助言：英語教育推進リーダー］ • 指導案検討 90分 • 模擬授業、指導案検討 90分 • 公開授業発表会(3授業を県内の他校教員に対して広く公開) ［指導助言：大学教授・県教育委員会指導主事・英語教育推進リーダー］ • 公開授業発表会の事後検証会 90分	• 教室英語、発音トレーニング 60分
冬季休業	• 3学期に使う教材作成 60分 • 次年度に使う教材の作成・整備 60分	• 絵本の読み聞かせ講習会②(60分) • 教員のリクエストに応じた講習会 60分
3学期	• 研修のまとめ 90分 • 次年度の年間指導計画協議 90分	

(6) 校内研修における本書の活用例

校内研修の際には、以下を参考に活用されたい。

研修内容	本書の活用例
指導案の事前検討会	「授業研究編Ⅰ・Ⅱ」(p.31～88)を使い、単元指導計画の立て方や授業研究の視点を参考にしながら、指導案を作成・検討する。
研究授業後の研究協議会	「実践編」(p.89～116)の指導法の在り方を参考にしながら、授業づくりの具体について話し合う。
英語力のブラッシュアップ	「実習編」(p.117～146)を使い、教員の英語力向上を目指した研修を行う。

2 授業研究の進め方

他教科等と同じように、外国語活動・外国語科においても「授業づくり」が大切である。「授業づくり」を校内教員と共同で行う授業研究は校内研修の要であると言える。ここでは、校内研修における授業研究の進め方について述べる。

1 授業研究のねらい

校内で行う授業研究は、教員の指導力向上のみならず学級経営や学校経営を支えるものであり、主に次のねらいが考えられる。

① 指導法や教材開発の手法を検討・共有することで、教員一人一人の指導力向上を図る
② 授業づくりに対して校内教員の共通理解を図り、学校として共通指導を行う
③ 学級それぞれの児童の実態を互いに見ることで、悩みや課題等を教員間で共有し、学級経営に生かす
④ 学校全体の課題を全教員で共有し、課題解決のための共通指導を全校体制で行うことで、学校経営に生かす

特に、外国語活動・外国語科の授業においては、児童一人一人が声に出す場面、児童同士がコミュニケーションする場面が多いことから、児童それぞれの実態や児童同士の人間関係が見えやすい。外国語活動・外国語科の授業研究を進めることは、学級経営や学校経営において大きな役割を果たすといえるだろう。

2 授業研究の実施方法

教員の中には、現行の外国語活動の授業経験がない方も少なからずいると思われる。また、自身の英語力を不安視するあまりに消極的になる方もいるかもしれない。授業研究を行うに当たっては、「授業をしたことがない」「英語が苦手だから」という教員の不安感を解消し、全教員が外国語活動・外国語科の授業研究に取り組むことができるようにすることが大切である。そのために、外国語活動・外国語科の授業研究においては、特に以下の点について留意したい。

(1)「教科横断的な授業づくり」という視点で授業研究を行う

小学校教員の強みは、すべての教科等を教えていることである。加えて、教員それぞれが、いずれかの教科等の指導法を得意としていたり、深く研究していたりする。外国語活動・外国語科の授業研究に当たっては、ぜひ、これら他教科等の指導法や知見を大いに活用してほしい。例えば、児童の発声という視点では音楽の指導技術が生きてくるであろうし、児童の活動量の確保という視点では体育の指導法が応用できるであろう。このように、各教員の指導経験や得意分野を生かしながら、教科横断的に授業づくりや授業研究を行うことが望まれる。また、外国語活動・外国語科の授業研究で得られた（高められた）指導法等を、他教科等の指導にも生かすことで、さらに学校全体として指導力向上を図ることができるのである。

(2) 英語担当指導主事や英語教育推進リーダー等、校外の専門的な立場の方から指導助言をしてもらう

前述のように、他教科等の指導法等を取り入れながら、教科横断的に授業研究を行いながらも、加えて、英語の指導法という専門的な見地も必要である。日常的には各学校の中核教員を中心に研究を

進めつつも、授業研究の際は、各都道府県教育委員会や市区町村教育委員会の担当指導主事、英語教育推進リーダー等、校外の専門的な立場の方を招聘し指導助言をもらうことが大切である。教科横断的に授業研究を進めるという側面と、英語という専門的な見地から研究を深めるという側面の双方を大事にしたいところである。

(3) 全教員が「授業づくり」を体験できるような活動を取り入れる

学校全体での授業研究とするためには、現行の外国語活動の授業経験がない教員、あるいは、新学習指導要領の全面実施後は１・２年の担当教員の参加意欲をいかに高めるかがポイントとなる。そのためには、他教員の授業を観て協議する場だけでなく、教員一人一人が当事者意識をもって授業づくりを体験する場を設定することが必要である。ここでは、「①体験型」と「②参加型」の例を紹介する。どちらも、放課後や長期休業中など、児童がいない中で行うことができるものであるが、いずれも教員が授業づくりを楽しみながら行うことが大切である。

① 体験型：教員が児童役となって模擬授業を受ける

- 中核教員等が教師役となり、他教員は児童役となる
- 教師役の教員は、活動ごとに区切って、その活動のねらいやポイント等について解説を加える
- 児童役の教員は、実際に活動を体験した上で、そのねらいやポイント等を学ぶ
- 模擬授業後の協議では、全教員で、授業づくりのポイントについて総括するとともに、例えば特別支援的な視点から「教材提示の工夫」や「明確な指示」等について話し合う
- 研究授業で行う授業と同じ内容とし、事前の指導案検討会と位置付けてもよい

② 参加型：複数教員で協力して授業づくりや教材作成をする

- 体験型の模擬授業や研究授業・研究協議を経験した後、外国語活動・外国語科の授業に対する理解がある程度進んだ段階で行うとよい
- １グループ３～５名程度の教員で、担当学年や教員経験が偏らないように編成する
- グループ共通の課題あるいはグループそれぞれの課題を設定する（例えば、「英語での分かりやすい指示の方法」「児童の活動意欲を高める場面設定」「効果的な視覚的教材の活用」などの課題を設定することが考えられる）
- グループで話し合いながら、1 単位時間（45 分）の授業、あるいは、その中の一部の活動について指導案を作成する（教材作成を含む）
- グループ内で、教師役・児童役を決めて、作成した指導案に基づいた簡単な模擬授業を行い、その後、グループ間で共有する
- 後日などに、他グループの教員を児童役として、各グループが模擬授業を行う機会を設定すると、より研究を深めることができる
- 作成した教材やワークシート等を、学校共有の教材等として保管するとよい

なお、授業研究の進め方の具体については、「教員の指導力向上を図る取組事例」（p.185～207）に掲載の各地の取組事例を、授業改善のポイントについては、「4 授業改善の視点」（p.175～181）を参照されたい。

3 カリキュラム・マネジメントを推進するために

「カリキュラム・マネジメント」とは何か。この言葉を、新小学校学習指導要領改訂に向けての中央教育審議会等による報告や、「答申」で何度となく目にされたことと思う。これは、今次改訂の大きなポイントでもあるが、これを中学年に外国語活動及び、高学年に外国語が導入されたことによって生じた35単位時間増をどう教育課程に収めるのかという、単に時数のやりくりととらえる傾向があるように思う。ここでは、「答申」や新学習指導要領をもとに授業で「カリキュラム・マネジメント」とは何かを述べた上で、外国語活動や外国語科での授業で「それがどう生きていくか」について考えることにする。

1 カリキュラム・マネジメントとは何か

(1) 新学習指導要領における定義

新学習指導要領では、「カリキュラム・マネジメント」について、次のように記されている。「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」。この定義から考えると、単に時数合わせではないことが分かる。

さらに、「答申」には、その側面が次のように記されている。

① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと

② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルと確立すること

③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

この3つの側面が大切ではあるが、筆者は、特に①がその根幹であると考える。新学習指導要領では、子供に育みたい資質・能力に共通する要素を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱で整理しているが、これらは、各教科等だけではなく、教科等横断的な力にも共通している要素である。よって、これらの力は、全教育課程で計画的・体系的に育んでいく必要がある。

(2) 社会に開かれた教育課程

今次改訂においては、「資質・能力」や、「主体的・対話的で深い学び」、「カリキュラム・マネジメント」、英語や道徳の教科化、プログラミング教育など様々なキーワードがあるが、「社会に開かれた教育課程」がその大きな基盤であり、新学習指導要領では、総則の前に新たに「前文」を設け、「社会に開かれた教育課程」の方向性が記されている。なぜ、資質・能力を育むのか、なぜ「カリキュラム・マネジメント」が必要なのかは、この「社会に開かれた教育課程」の実現と大いに関連する。

「答申」では、この「社会に開かれた教育課程」について、次の3つの側面が記されている。

① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目

標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと

② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い、自らの人生を切り開いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化して育んでいくこと

③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること

これを簡単に言うと、「これから子供たちが生きていく社会がどういう社会で、そのためにはどのような力を身に付けるべきか」ということを社会と共有することである。「社会に開かれた教育課程」とは、これから子供たちが生きていく社会や時代がどのようなものになるのか、そのためにはどのような力を子供たちが身に付けている必要があるのかを、学校という場だけでなく、社会と共有するということである。このグローバル社会で、大人の生活は多様になり、それに伴って子供たちの生活も当然多様になり、様々な教育的ニーズが生じてくる。そのような状況においては、学校教育だけでなく、社会が子供に付けたい力を共有し、子供に関わっていく必要が出てくる。また、子供の成長を長いスパンで考えれば異校種間の連携は必須である。子供たちが、多様な人々とつながって学ぶことができる環境が大切である。

さらに、この数年は、大量退職・大量採用の影響などにより、地域や学校によって中堅の役どころの教員の数が極端に少なく、校内で年齢構成のバランスが崩れるという現象が生じている。そのため、先輩教員から若手教員への指導技術の伝承が難しくなっているという状況もある。そこで、「社会に開かれた教育課程」には、単に学校と学校外の連携を深めるだけでなく、学校内での教員同士の連携も不可欠である。

このように見ていくと、「社会に開かれた教育課程」と「カリキュラム・マネジメント」は大いに関連していることが分かる。各校で既に実施されている教育活動や学校運営活動が個別になされていないか、その改善が個別にとどまっていないか、教育課程全体の改善という視点からなされているかを見直すことが大切である。

2 「カリキュラム・マネジメント」の具体

(1) 教科等における「カリキュラム・マネジメント」

簡単に言えば、1 時間の授業を行う際に、1 時間だけで授業を設計しない、1 単元で設計する、そして、1 年間で設計するということである。更には、2 年間で、6 年間で、そして義務教育の 9 年間で授業を設計することである。1 時間のその授業は、単元の中で、1 年間の中でどのような位置付けとして指導するかを常に教員が意識して指導することが大切である。また、逆に言えば、子供の実態や学校、地域の特性、保護者や地域の願いを踏まえて設定された学校の教育目標に記された子供に付けたい資質・能力の育成に向けて、どんな教育活動を、どんな教育資源を活用しながらどのように実施していくのかを明らかにすることである。一人の子供の中で学ぶことが教科等の枠を超えてどう関連付いていくのかを明らかにして授業を創っていくことが大切であり、「カリキュラム・マネジメント」は管理職だけが行うものではなく、教職員全体で行っていくものである。

(2) 外国語教育における「カリキュラム・マネジメント」

現行学習指導要領において外国語活動を実施する場合には、文部科学省が開発配布をした教材例

『Hi, friends!』を活用している学校がほとんどであるが、学校によっては、それをそのまま活用せず、子供や学校の実態にあわせてアレンジをして活用している。これも、「カリキュラム・マネジメント」の 1 つである。また、ALT 等の外部人材の役割と学級担任の役割を明確にしながら授業を展開していることも、その 1 つである。更に、外国語活動の年間指導計画を作成する際には、他教科等との関連を考え、他教科等で学習した内容や活動を外国語活動に取り入れたり、また逆に外国語活動で学習した内容や活動を他教科等に取り入れたりした教科横断的な年間指導計画に基づいて授業を展開することも、その 1 つである。そういう授業の中でこそ、「主体的・対話的で深い学び」が実現される。

ところで、今次改訂において小学校教育関係者の大きな不安の 1 つが、増加した 35 時間という時数をどう教育課程に収めるかであろう。ここもまさに、「カリキュラム・マネジメント」であり、先述した通り、単に 35 時間をどう収めるかという時数合わせにならないようにしたい。とはいえ、現実問題、その増加分をどのように収めるかについて述べておきたい。

文部科学省では、平成 29 年 2 月に「小学校におけるカリキュラム・マネジメントの在り方に関する検討会議」が審議を「報告書」（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/new/1382237.htm）の形でまとめ、時数の様々な取り方の具体を示しているので参考にしていただきたい。中でも、「答申」でも記されているが、増加した時数を短時間学習という形で実施することが考えられる。高学年外国語においてもその実施が考えられるが、その際には、15 分などの短時間学習と 45 分のまとまりのある学習との関連を明確にすることが大切である。15 分などの短時間学習で、45 分との関連なしに、また、ねらいを明確にせず、安易に文字の書き方の練習に取り組ませたり、映像資料を視聴して、目的や場面の設定なしに単に語彙や表現を繰り返させたりするだけの活動は避けなければならない。短時間学習を設定することで、児童が外国語に触れる回数が増えるというメリットを活用しつつも、聞いたり言ったり、また読んだり書いたりする目的や場面を設定し、取り組ませることが大切である。また、45 分に 15 分を加えた 60 分授業の設定も考えられる。例えば、単元終末に児童が伝え合う時間をたっぷり設定したり、パフォーマンス評価の時間に当てたりすることも考えられる。

いずれにしても、時数合わせが先ではなく、全体の計画の中で、短時間学習を設定することの意義を見極めて取り組む必要があることは言うまでもない。

なお、中学年においては、答申で「年間 35 単位時間、週当たり 1 コマ相当の外国語活動を、短時間学習で実施することは困難であり、小学校の教育課程全体を見通して弾力的な時間割編成を行っていくことが必要」とされている。

「カリキュラム・マネジメント」を難しく考えず、まずは、毎時間の授業を学校の教育活動全体の中でどのような位置付けかを意識して設計する。そうするためには、学校教育目標を踏まえ、教科等を超えた全体計画を管理職も交えて全教員で作ることが必要となる。そうする中で、学校教育目標を達成するのに、各教科等の担う役割や、その指導の在り方が明確になる。そうした上で、増加した 35 時間を全教育課程のどの部分に収めるのが適切かを考えることが大切である。

4 授業改善の視点

授業改善のポイントは、「担任が主導して」「単元のゴールを示し、単元構成を工夫しながら」「1時間の流れをシンプルにパターン化し」「振り返りを充実させながら」行うことであると考える。同時に、「シンプルで分かりやすい評価に努める」ことも必要である。そこで本節では、これらの視点から、学級担任が主導で授業を行っている宮若市の事例（「英語教育強化地域拠点事業」の研究校）を取り上げ、授業改善について考えていく。

1 担任が主導する授業をしよう！

「児童の実態を把握して、児童の反応や意欲を見取り、指導に生かすことができる」、「他教科等との内容を生かした活動をすることができる」など、学級の児童の把握に関するプロである担任が授業を行うメリットは多々挙げられる。評価についても、担任は「行動観察」のほか、「評価補助簿」や「振り返りシート」等を利用して、様々な評価が可能である。

では、学級担任が授業を主導する場合、どのようなことを心がけて外国語の授業に臨めばよいかを以下に挙げる。

(1)「前に立って」、授業の「スタートの挨拶をする」

授業中は他の授業と同様に、まずは前に立って授業を進めるようにする。事前に打ち合わせで確認した発音練習等の「ALT に任せる場面」以外は、自分が前に立って授業を進める。

HRT: Hello, Kate *sensei*.
ALT: Hello, Suzuki *sensei*. How are you?
HRT: I'm wonderful.（ジェスチャーをしながら笑顔で答える）

これを心掛けるだけで、自分が授業を進めなければならないという意識が高まる。後は、打ち合わせした通りに進める努力をすればよい。ALT ときちんと打ち合わせをしておけば、しっかりサポートしてくれるはずである。

(2)「ほめる言葉を使う」、ALT の英語の「指示を繰り返す」

「英語でしゃべらなければならない」と思うと、かなりプレッシャーになるだろう。まずは、「ほめる英語」をしっかり覚え、それを使う。そして、指示を出す場面で必要な言葉については、ALT に英語で言ってもらうようにお願いをしておく。例えば、「円になりましょう」と言いたい場合に "Make a circle." と ALT が言ったら、ジェスチャーで円を示しながら "Make a circle." と繰り返すようにする。長い表現の場合は、文末のみを繰り返してみる。これを繰り返せば、使う頻度の高いクラスルーム・イングリッシュについては徐々に言い慣れてくる。また、"Good job." "Excellent!" 等、ほめ言葉を多用する。教室の見やすい場所に〈図表 1〉のような表を常掲しておくと活用できる。

〈図表 1〉ほめる言葉をまとめた掲示物

(3)「ALT とのやり取り」を大切にする

児童が英語を使うことに慣れるために、担任も ALT と英語でやり取りし、「英語を使うモデル」になることを大切にしたい。つまり、「英語での言い方が分からないときは、ALT に尋ねればよい」ことを意識させるためには、担任が ALT に英語で尋ねる姿を見せればよいのである。例えば、ALT が児童に見せた写真の中に「花火」があったとする。「花火は英語でなんて言うんだろう」という児童の発言があった時に、その尋ね方を教えるとよい。中学年ならば "*Hanabi* in English, please."、高学年ならば "How do you say *hanabi* in English?" と、尋ね方を教える。これを繰り返していくと、児童は英語での言い方が分からない時に、この表現を使って ALT に尋ねるようになっていく。担任自らが「英語を使うモデル」になるのである。また、担任自身が相手の言ったことに反応するように意識すると、児童も "Me, too." "I know." "Really?" 等のように反応し、やり取りの楽しさが増し、会話が続くようになる。

2 単元構成を工夫しよう！

(1) 単元のゴールを示す

授業設計の際、単元の「ゴール」として、英語の表現を学びたいという思いを高めるためのコミュニケーション活動を設定することの大切さについては、多くの先生が認識されていることであろう。単元のゴールに設定されたコミュニケーション活動を行うためには、必要な表現や語彙を使うことができるようになるための活動を段階的に設定していく〈図表 2〉。ゲームをするから楽しいのではなく、児童の知的好奇心を満たし、考える場面のある魅力的な活動があるから楽しいと感じる授業にしたい。

① 単元終末に設定されたゴールを知り、そのために必要な新しい表現に出合う活動
② 新しい語彙や表現に慣れる活動
③ 表現（やり取り）により慣れる活動
④ 友達と協力して課題を達成するコミュニケーション活動

〈図表 2〉単元構成の工夫（単元のゴールに向かう活動）

例えば、3年生の「友達に作ったお弁当を紹介しよう!」という単元では、① 遠足の時期に、教師が作ったお弁当の中身を英語で紹介する、② お弁当に入れたい物の英語での言い方を知る（おにぎり、おかず、果物等）、③ 入れたい物の言い方やそれを買う時の買い物の表現を練習する、④ 買った品物でお弁当を作り、紹介し合う。児童は、自分だけのオリジナル弁当を作るために、自分が入れたい食べ物の表現を主体的に練習する。学年が上がるのに合わせて、おにぎりの種類（salmon rice ball, pickled plum rice ball, tuna rice ball）を増やしていくと、児童の意欲はより高まる。

4年生の「夢の一日の絵本を作って読み聞かせをしよう!」という単元では、① 絵本『Good Morning』（文部科学省）の読み聞かせを聞いて、内容を理解する。教師が作った絵本を示し、自分たちが作る絵本のイメージをもつ、② 絵本作りに必要な表現を知る、③ 自分の絵本の読み聞かせに必要な表現を ALT に尋ね、練習する、④ 3年生に絵本の読み聞かせをする、と展開していく。

また、5年生の「宮若おすすめマップを作ろう!」という単元では、① ALT の自国の紹介を聞く、② 宮若のおすすめの場所を You can ~. を使って紹介する表現について調べる、③ 友達と写真の一部分を見せながら「What's this? クイズ」を出し合い、宮若のおすすめマップを完成させる、④ 宮若のおすすめの場所を ALT に紹介する、となる。

3年生に読み聞かせを行う様子（4年生）

宮若の紹介の様子（5年生）

このように、単元のゴールを設定し、それに向かって必要な表現を練習していくことで、目的意識が明確になるため、児童は大変意欲的に学習に取り組むようになる。単元のゴールを設定しながら、レッスンプランを作っていく時、「何のために」「何を」行うのかを、児童の実態に合わせて検討することが大切である。同じゴールであっても、扱う表現や語彙は学級の児童の実態に合わせて修正することも必要であり、それを行うことができるのは担任である。担任が授業を設計し主導する価値はここにもある。

(2) 単元構成を工夫する（モジュールの導入／ 5 年生の例）

時		目標と活動内容
1	45	○単元のゴール「学級の好きなものランキングを作る」を知り、What ～ do you like? を使うと、いろいろな好きなものを聞くことができることに気付く。
2	15 15 15	モジュール学習【単語練習編】 ・スポーツ、果物、動物等の単語 (キーワード・ゲーム／ドンじゃんゲーム)
3	45	○好きなものは何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。
4	15 15 15	モジュール学習【使用表現練習編】 ・好きな物を尋ねる表現等 (全体でやり取りしながら) カード取りゲーム
5	45	○友達と好きなものを尋ねたり、答えたりしてインタビュー・ゲームをする。
6	15 15 15	モジュール学習【使用表現活用編】 ・インタビューの練習等 (ペアでやり取りしながら) ビンゴ・ゲーム／インタビューのプレ練習
7	45	○インタビュー・ゲームをして作った好きなものランキングを紹介し合う。
8	15 15 15	モジュール学習【全体の振り返り】 ・ランキング紹介、絵本等 (ランキングの紹介の続き、感想の紹介等)

〈図表 3〉5 年生の単元指導計画（例）（全 8 時間）

授業を 8 時間で構成した場合、〈図表 3〉のように短時間のモジュール学習を取り入れることも考えられる。特に単語や使用表現を定着させたい場合、児童が飽きずに集中できることや英語に触れる回数を増やすことができる。その場合、モジュールの内容も「単語→表現→やり取り→ゴールの活動」へと自然につながる内容にする。

例えば、2 (1) で取り上げた「宮若おすすめマップを作ろう！」の場合、学習に入る前のモジュール学習で、ALT の自国の紹介 VTR を見せることで、「自分たちの地域のことも知らせたい」という思いを高めることができる。単元の最後のモジュール学習では、全体の前で発表ができなかった児童の発表を行うこともできる。また、単元全体の振り返りを行ってもよい。モジュールでの短時間活動を効果的に取り入れることで、児童の集中力が高まり、単元のゴールで使用する英語表現の定着に有効である。

3　1時間の授業をパターン化させよう！

(1) 授業構成の工夫

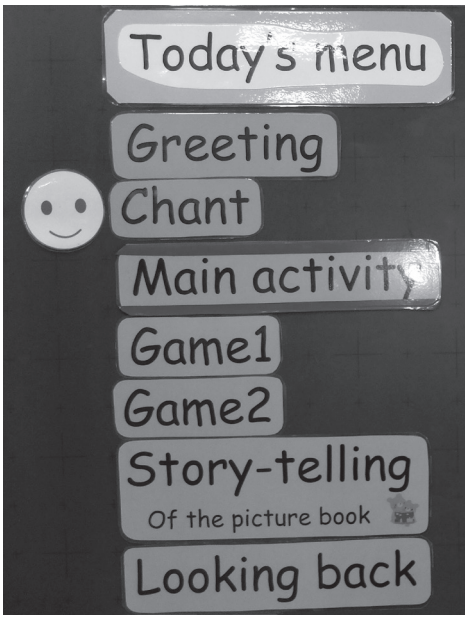
毎回の授業をある程度パターン化すれば、授業の流れができ、担任主導で授業を行うことへの負担感が少なくなる。また、児童にとっても、「授業の見通しをもつことができる」という大きなメリットがある。

例えば、1時間を大きく「Warming up」「Activity」「Looking back」の3つに分ける〈図表4〉。「Warming up」では、歌やチャンツを用意すればよい。その際、授業の使用表現を扱う内容であればなおよい。その後、本時のめあてを確認し、本時のメイン活動「Activity」へと移行する。デモンストレーションは、ALTと一緒に行う。実物やジェスチャーを使って推測させながら、活動の仕方を把握させるようにする。メインの活動の後には、絵本の読み聞かせ等を行い、絵を手がかりに内容を推測させながら、たくさんの英語を聞かせる。振り返りの時間「Looking back」は、十分に取るようにする。他教科の学習と同じように、自己評価や相互評価を取り入れながら、学習した喜びや充実感をもたせるようにする。

黒板には、〈図表5〉のように、「Today's menu」として掲示し、1時間の授業の流れが見えるようにしておくとよい。

Warming up （始めの挨拶）	英語の時間の雰囲気作り、動機付け • 前時までに親しんだ表現（歌・チャンツ等） • 既習表現を使用する帯活動 • 【めあての確認】
Activity （本時の活動）	めあてを達成させるための活動 • 新しい言語材料のインプット • コミュニケーション活動、自己表現活動 • 絵本の読み聞かせ
Looking back （本時の振り返り）	学習の喜びや充実感の醸成 • 振り返りカードの活用による自己評価・相互評価 • 終わりの挨拶（活動への賞賛）

〈図表4〉1時間の授業構成



〈図表5〉1時間の流れがわかる掲示例

(2) 既出表現を繰り返し使う帯活動の導入

高学年では、授業の最初の「Warming up」で帯活動を取り入れてもよい。既出表現を使った簡単な質問を聞き、それに答えたり、ペアでやり取りしたりする形式にする。英語学習への雰囲気作りとともに英語を話すことへの抵抗を減らし、その場で尋ねたり答えたりすることに慣れさせることをねらう。

例えば、既出内容と関連付け「好きな色、（食べ物、動物、果物等）」「できること」「ほしいもの」「食べたいもの」「行きたいところ」「起きる（寝る）時刻」「なりたい職業」等のカードを作成し、ペアでカードを引きながらお互いに質問したり答えたりし、英語での複数回のやり取りをする形式も考えられる。コミュニケーションのポイント（Eye contact, Smile, Clear voice, Reaction等）を意識させ、心地よく楽しい「英語でのやり取り」ができる活動にする。特に、相手の言ったことに反応させる“Reaction”を大切に行うと、ALTの言ったことに自然と反応したり、聞き返したりする習慣も身に付いてくる。

4 評価を工夫しよう！

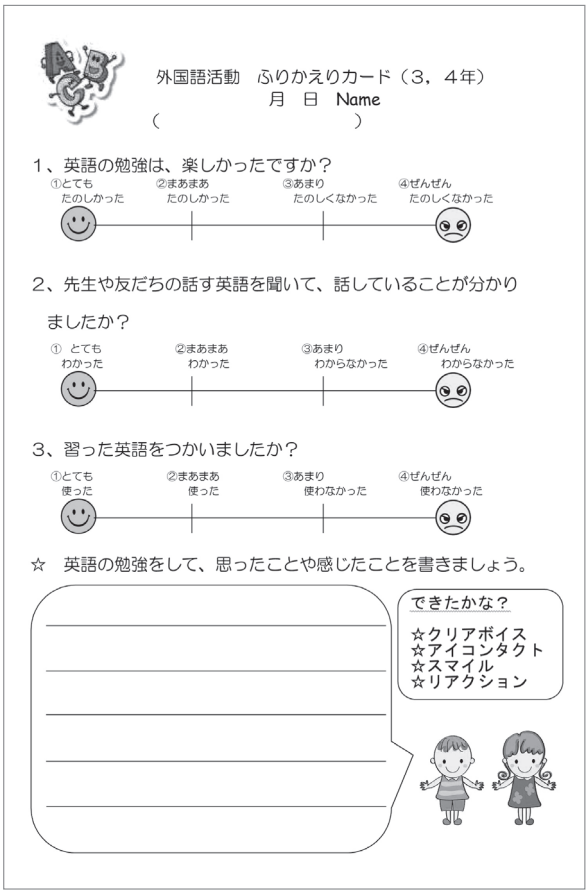
現行の外国語活動では、「①コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「②外国語への慣れ親しみ」「③言語や文化に関する気付き」の観点で、評価規準を明確にし、行動観察やワークシートの点検、振り返りカードの点検・分析等で評価を行うことが多い。

教科になると、各観点で「できるかどうか」の評価も必要になってくる。ここでは、外国語活動及び外国語科の評価方法をどのように工夫していけばよいかについて考えてみる。

(1) 振り返りカード

授業の最後に、振り返りの時間を取ることの重要性については、前述の通りである。教師が授業における児童の頑張りを認めるコメントをした後、本時のめあてを再確認し、振り返りカードに記入させるとよい。〈図表 6〉は、外国語活動の振り返りカードの例である。「楽しかったか」「英語を聞いて分かったか」「習った英語を使ったか」を尋ね、上記の①②の視点の自己評価とする。また、文章で感想等を記入する欄を設ける。担任による視点の提示により、上記の③の内容も記入されるため、その記述内容から評価を行う。また、コミュニケーションのポイントを示し、その自己評価もする形式にするとよい。児童が心地よいコミュニケーションのために必要なポイントを意識するようになる。

教科では、〈図表 7〉のような振り返りカードもよい。各単元 1 枚で作成し、本時のねらいに即した自己評価を行う。それと同時に、教師も評価補助簿〈図表 8〉を活用し、評価を行う。「本時は、ねらいに即して、この姿が実現している児童を見取ろう」と、教師自身が評価の観点を明確にして行う必要がある。児童一人一人を単元全体を通して見取るようにし、評価のための指導にならないように留意することが重要である。


外国語活動　ふりかえりカード（3，4年）
月　日　Name
（　　）

1、英語の勉強は、楽しかったですか？
①とても たのしかった　②まあまあ たのしかった　③あまり たのしくなかった　④ぜんぜん たのしくなかった

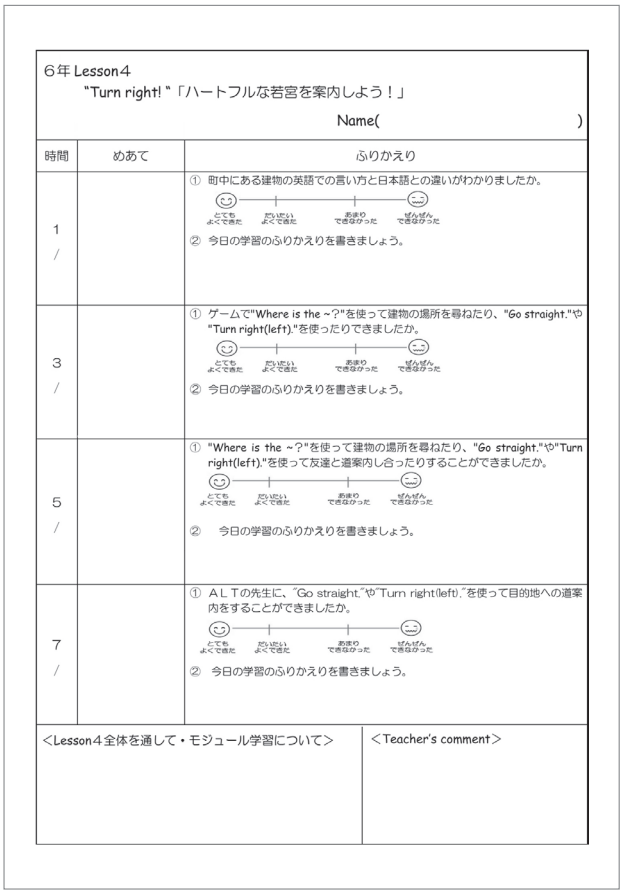
2、先生や友だちの話す英語を聞いて、話していることが分かりましたか？
① とても わかった　②まあまあ わかった　③あまり わからなかった　④ぜんぜん わからなかった

3、習った英語をつかいましたか？
①とても 使った　②まあまあ 使った　③あまり 使わなかった　④ぜんぜん 使わなかった

☆　英語の勉強をして、思ったことや感じたことを書きましょう。

できたかな？
☆クリアボイス
☆アイコンタクト
☆スマイル
☆リアクション

〈図表 6〉外国語活動振り返りカード（例）


6年 Lesson4
"Turn right!"「ハートフルな若宮を案内しよう！」
Name(　　)

時間	めあて	ふりかえり
1 /		① 町中にある建物の英語での言い方と日本語との違いがわかりましたか。 とても よくできた　だいたい よくできた　あまり できなかった　ぜんぜん できなかった ② 今日の学習のふりかえりを書きましょう。
3 /		① ゲームで"Where is the ~?"を使って建物の場所を尋ねたり、"Go straight."や"Turn right(left)."を使ったりできましたか。 とても よくできた　だいたい よくできた　あまり できなかった　ぜんぜん できなかった ② 今日の学習のふりかえりを書きましょう。
5 /		① "Where is the ~?"を使って建物の場所を尋ねたり、"Go straight."や"Turn right(left)."を使って友達と道案内し合ったりすることができましたか。 とても よくできた　だいたい よくできた　あまり できなかった　ぜんぜん できなかった ② 今日の学習のふりかえりを書きましょう。
7 /		① ＡＬＴの先生に、"Go straight."や"Turn right(left)."を使って目的地への道案内をすることができましたか。 とても よくできた　だいたい よくできた　あまり できなかった　ぜんぜん できなかった ② 今日の学習のふりかえりを書きましょう。

＜Lesson4全体を通して・モジュール学習について＞	＜Teacher's comment＞

〈図表 7〉外国語科振り返りカード（例）

	時	第1時		第3時		第5時		第7時	
	各時間の評価	町中にある建物の言い方の日本語との違いに気付いている。道案内の言い方を言っている。		"Where is the ~？" を使って建物の場所を尋ねたり、"Go straight."や"Turn right(left)." を言ったりしている。		"Where is the ~？"を使って建物の場所を尋ねたり、"Go straight."や"Turn right(left)."を使って友達と道案内し合っている。		ALTの先生に、"Go straight."や"Turn right(left)." などを使って目的地への道案内を相手に伝わるように工夫している。	
	氏名	発言・行動	記述	行動	記述	行動	記述	行動	記述
1	○○○○								
2	△△△△								

〈図表 8〉6 年生・評価補助簿（例）

(2) CAN-DO リストに即したパフォーマンス評価

児童の学年末の目指す姿をイメージして CAN–DO リストを作成しておくとよい。CAN–DO リストを作成して目指す児童像について校内で共通理解を図ることで、目標に向けてどのような指導をしなければならないかが明確になる。その姿をどの程度実現しているかを見取る方法として、「パフォーマンス評価」がある。

パフォーマンス評価は、パフォーマンス評価用紙〈図表 9〉を使用しながら、各学年末に ALT の協力のもと行うことも考えられる。挨拶から始め、英語でのやり取りをしながら、「聞く力」「話す力」の評価を行う。評価項目は、各レッスンでのねらいと CAN–DO リストを照らし合わせ、児童の実態に合わせ作成していくとよい。その際、評価の観点を明確にし、複数の場合には評価者が評価内容・方法を共通理解しながら評価を実施する必要がある。学年に応じて、手掛かりとなる文字付き絵カードを示しながら、児童が大きなプレッシャーを感じることなく、リラックスしたムードの中で行うように雰囲気づくりをする。また、児童が答えた内容でカードを作り、パフォーマンス評価の終了時にプレゼントするなど、児童にとって答える必然性をもたせるなどの工夫をするとよい。

パフォーマンス評価の様子

領域	内容	評価規準	評価	単元
聞・話	好きなもの	**Do you like ~? 「subject」**と尋ねると、答えることができる。 A：Yes, I do./No, I don't.　B：Yes./No.のみ　C：答えられない		L4
		好きな動物の質問に、答えることができる。 **What animal do you like?** A：I like ~. を使って　B：動物のみ　C：答えられない		L5
		好きなスポーツの質問に、答えることができる。 **What sport do you like?** A：I like ~. を使って　B：スポーツのみ　C：答えられない		L5
	これは何？	**What's this? 「Miyawaka guide pictures」**と尋ねると、答えることができる。 A：It's ~. を使って　B：名詞のみ　C：答えられない		L7
	丁寧な答え方	**What would you like? 「menu」**と尋ねると、答えることができる。 A：I'd like ~. を使って　B：名詞のみ　C：答えられない。		L9
	数量	**How many ~?** と尋ねると、答えることができる。 A：Fifteen lemons.　B：Fifteen.　C：答えられない		L3

〈図表 9〉5 年生・パフォーマンス評価用紙（例）

授業改善という視点で、担任が授業を行うポイントを挙げてきた。外国語活動も外国語科も他教科等と同様である。担任が児童の実態に合わせて、目指す姿をイメージしながら授業づくりを行っていくことが重要である。外国語の評価については、「英語を話せるか」「英語の文字を書くことができるか」といった能力面の評価にとどまらず、「英語を学んで児童にどのような力が身に付いたか」という学習の成果を捉えることが重要である。

5 小中連携の在り方

学校間の接続を円滑にし、小学校における学びを中学校につなげ、コミュニケーションを図る資質・能力の育成という目標の実現のためには、小中連携が鍵となる。特に、指導目標と内容の点から小中連携の在り方を解説する。

1 指導目標の連携

今回の改訂では、小・中・高で一貫した目標の実現を図るため、また、「外国語を使って何ができるようになるのか」を明確にするために、「聞くこと」「読むこと」「話すこと［やり取り］」「話すこと［発表］」「読むこと」の領域別の目標が設定されている。児童生徒の発達の段階を捉えて指導に生かすために、各段階の領域別の目標を比較し、何を身に付けさせるのかを理解することが重要である。

例として小学校と中学校の外国語科の「話すこと［発表］」の目標を取り上げる（下線は筆者）。

小学校外国語科の「話すこと［発表］」の目標	中学校外国語科の「話すこと［発表］」の目標
ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。 イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。 ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

まず、一重下線で示した話題に関する文言を見ていただきたい。小学校段階では「日常生活に関する身近で簡単な事柄」「自分のこと」「身近で簡単な事柄」について話すことができるようにするとされている。それが中学校段階では、「関心のある事柄」「日常的な話題」「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたこと」とされており、話題が、児童生徒自身のことから、より広いものへと広がっている。話題の相違は、使用する語句の違いになって現れる。例えば、一日の家庭生活に関する語句（例：take out the garbage, wash the dishes, walk my dog, clean the room）などは、日常生活に関する身近で簡単な事柄を表すものであり、小学校で扱うのに適している（p.56，第５学年 年間指導計画例〔案〕Unit 4 参照）。授業の中で扱う語句が、小学校段階の話題を扱うのに適したものとなっているかを判断し、中学校段階で扱うのに適している場合には再検討することも必要である。

次に、二重線で示した話す内容に関する文言を見ていただきたい。小学校段階では「自分の考えや気持ちなど」を話すこととされているのに対して、中学校段階では「事実や自分の考え、気持ちなど」や「考えたことや感じたこと、その理由など」を話すこととされている。中学校段階では、自分の考えや気持ちに加えて、「事実」や「考えたこと」や「理由」を伝えることとされ、高度化されている。

最後に、破線で示した使用言語の特徴に関する文言を見ていただきたい。小学校段階では「簡単な語句や基本的な表現を用いて」とされているのに対して、中学校段階では「簡単な語句や文を用いて」となっている。「基本的な表現を用いる」とは、好きなものを伝える時に I like ... と言えるということであり、〈主語＋動詞＋目的語〉という文構造の仕組みを理解した上での発話ではない。一方、「簡単な文を用いる」

とは、文構造の仕組みを理解した上で発話することを示している。また、中学校段階では「即興で」や「まとまりのある」という条件が付けられており、その場で考えて話したり、内容にまとまりをつけて話したりすることが求められている。小学校段階では「即興で」話すことは目標とされていないが、中学校段階を考えると即興で話すように励ますなど工夫をすることができる。

このように、各領域別に目標を並べることにより、小学校段階でどのようなことを指導するべきなのかを明確に把握することができ、中学校段階への接続を検討していくことができる。

2 指導内容の連携

語彙、表現などについては、小学校で学んだ学習内容を、中学校において小学校とは異なる場面で使ったり別の意味で活用したりするなど、言語活動において繰り返し活用し定着を図ることが重要である。また、小学校段階で扱った言語活動を発展させて、中学校段階にふさわしい言語活動にして行われるなどの連携を図るようにする。言語の使用場面や働きについても、同じ働きの場合（例：道案内や買い物という場面や、礼を言うや説明するという働き）には、言語活動の高度化を図ったり、使用される語彙や表現を複雑にしたりするなどして発展するように計画する。一方で、例えば、言語の使用場面の「挨拶」や働きの「挨拶をする」などのように小学校学習指導要領では記載されており、中学校学習指導要領では記載されていないものもある。繰り返し触れさせたり活用させたりしながら、

小学校段階において着実に指導することが必要である。

特に「読むこと」と「書くこと」の指導については、小学校段階では、文字の名称が発音できたり、文字の名称が読まれた時にどの文字か特定できたりするように指導するとしているが、語を書く際には「書き写すようにする」とされており、語の綴りを覚えるところまでは求められていない。しかしながら、語を書き写す経験は、中学校段階における「書くこと」の指導につながる重要な指導であると認識をして、「書くこと」の言語活動も十分に行う必要がある。

3 小学校教員と中学校教員との連携

小学校３年生で始まる外国語活動から中学校の外国語科へと小学校・中学校一貫して、児童生徒の学びを確かなものとするためには、小学校と中学校教員の連携が必要である。また、中学校区（中学校とその中学校に進学する児童の通う小学校）内での小学校の外国語科や外国語活動の実際を互いに理解するために、目標・指導内容等について、意見交換をしたり、授業参観等を行ったりして、理解を深めることが重要である。小学校で設定する領域別の目標、扱った話題、言語材料（表現・語彙）等の一覧の資料や児童の学習の進捗状況の情報があれば中学校に提供するとよい。

学校間の接続を円滑にし、小学校における学びを中学校につなげ、目標の実現を図るためには、小学校外国語科と中学校外国語科の連携を図ることが重要である。小学校段階と中学校段階の指導目標、内容などを比較・検討し、それぞれの学校段階でどのような指導をするべきか明確にすることが重要である。また、小学校・中学校の教師間の情報交換を通じて、指導目標及び内容等について知ることも必要である。